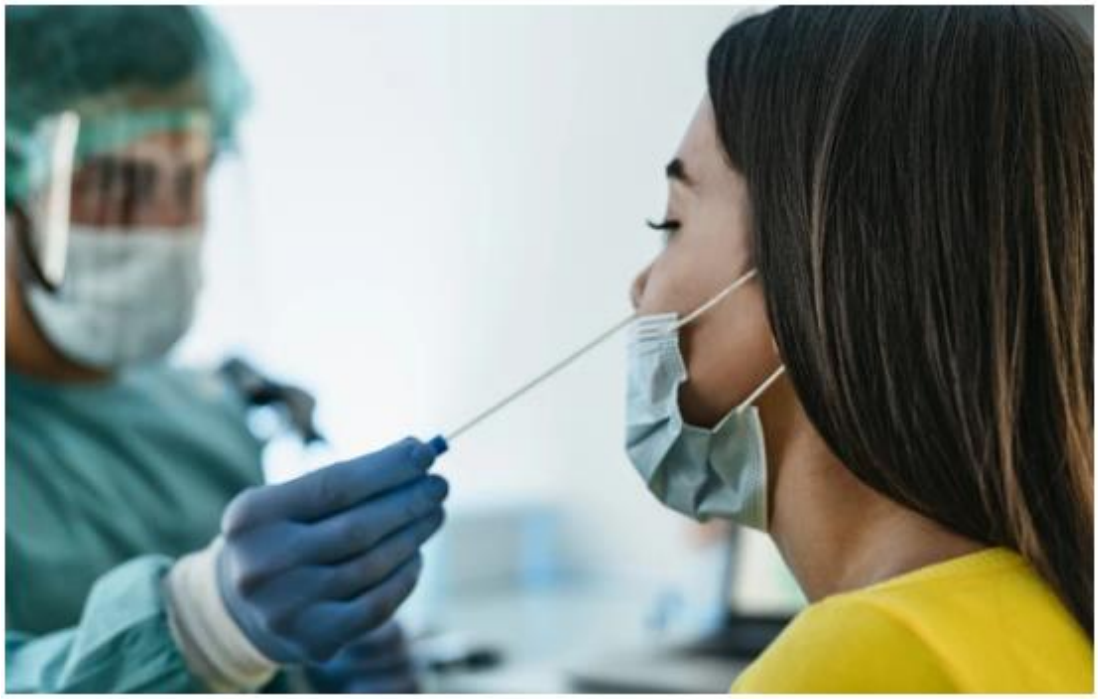
新型コロナ　感染１年後も血栓症のリスクが少し高い　2020 年データ

2022 年 10 月 12 日　毎日新聞



2020 年暮れまでに新型コロナウイルス感染症にかかった人は、感染から 1 年弱経た後でもまだ、体内に血栓ができるリスクがわずかながら高まっていた。こんな研究結果を、英ケンブリッジ大学の Angela Wood 氏らが発表した。論文は「Circulation」に 9 月 19 日に掲載された。研究の共同リーダーの一人である Wood 氏は「入院しなかった患者もリスクは高まっていた。個人レベルではわずかなリスクだが、（患者数が多いため）社会全体への影響は相当なレベルになりうる。血栓の発症を予防する戦略が重要になるだろう」と述べている。

新型コロナ流行の比較的早い段階から、感染すると血栓症のリスクが上昇する、という研究データが報告されていた。しかしそれらの研究は主として入院を要する重症患者が対象で、軽症患者での血栓症リスクは明らかでなかった。また感染後、長期間経った後のリスクも不明だった。

そこで、軽症患者や感染から長期間経った後の血栓症リスクを把握するため、Wood 氏らは、2020 年 1 月 1 日～12 月 7 日の、イングランドとウェールズの成人、約 4800 万人の電子カルテ情報を調べた。

イングランド（総数 4496 万 4486 人）では、新型コロナによる入院患者が 11 万 8879 人（10 万人あたり 264 人）、外来患者（診断後 28 日以内に入院の記録がない患者）が 124 万 8180 人（同 2,776 人）記録されていた。またウェールズ（総数 261 万 5,854 人）では同じ順に、7106 人（10 万人あたり 272 人）、7 万 1606 人（同 2737 人）が記録されていた。

この記録を使い、新型コロナと診断されてはいなかった人たちを基準にして、診断された人たちが血栓症にかかるリスクがどれだけ高まっているかを調べた。この分析の際には、血栓症の発症に影響を及ぼし得る要因（年齢、性別、人種・民族、地域、喫煙習慣、降圧薬・脂質低下薬・抗血小板薬・抗凝固薬の使用、ホルモン補充療法、大手術から 1 年

以内など）を最大限に考慮した。
診断直後の高リスクは急速に下がったが
　その結果、**血栓症のリスクは新型コロナと診断された直後が最も高く、その後は急速に下がるものの、約１年経過後でもまだ有意に（統計的に偶然でないほど）高かった。**
　具体的には、動脈血栓症（心筋こうそくや虚血性脳卒中など）にかかるリスクは、新型コロナとの診断後１週間は、新型コロナと診断されたことのない人に比べて約 22 倍に達していた。ハザード比（HR）は 21.7 だった（95％信頼区間 21.0～22.4)〕。また診断後 27～49 週では 34％高かった＝〔HR1.34（同 1.21～1.48)〕。一方、静脈血栓症（肺塞栓症や深部静脈血栓症など）にかかるリスクは、新型コロナと診断された後１週間は約 33 倍になり〔HR33.2（31.3～35.2)〕、診断後 27～49 週では 80％高まっていた＝HR1.80（1.50～2.17)〕。
　全体的に新型コロナ治療のために入院した患者の方がリスクが高く、外来で治療を受けた患者の血栓症リスクは低かった。しかし外来患者でも、新型コロナと診断されていない患者よりは、リスクの高い状態が長期間続いていた。例えば、入院しなかった新型コロナ患者の場合、診断後 27～49 週の動脈血栓症は HR1.21（1.05～1.40)、静脈血栓症は HR1.77（1.38～2.27）で、いずれも有意にリスクが高まっていた。
　Wood 氏とともにこの研究の共同リーダーを務めた Jonathan Sterne・英ブリストル大教授（医療統計学、疫学）は「(今回のデータで）血栓症のリスクは、新型コロナにかかった後、急速に低下することを再確認できた。一方、(それでもなお）リスクが高まっている期間はしばらく続くことが分かった。これにより、新型コロナの長期的影響について、我々が理解し始めたばかりであることが浮き彫りになった」と話す。
　また論文の著者たちは「リスクの高い患者に降圧剤を使うなどの方法で、深刻な血栓症の発症を減らせるかもしれない」と述べている
　なお、この研究はデルタ株やオミクロン株が出現する前で、かつワクチン接種が行われる前に実施された。このため現在、ワクチン接種後の新たな変異株感染時の血栓症リスクを調査中だという。